

白神山地の神秘性

—平尾魯仙と森山泰太郎—

弘前大学人文学部 山下祐介

1. はじめに——森山泰太郎と砂子瀬

西目屋村は白神山地の玄関口という位置づけになっている。その西目屋村の中でも、もっとも奥地に位置する砂子瀬・川原平は、江戸時代から白神山地との関わりが深い地域であった。砂子瀬・川原平はしかし、現在進められている津軽ダム建設に伴う移転によって消滅を余儀なくされ、すでに平成13年度中に姿を消してしまった。

この地域の生活文化の記録保存のため、西目屋地域生活文化調査委員会が編成され、筆者もその一員として調査に参加してきた。『砂子瀬・川原平の記憶 津軽ダム 西目屋地域生活文化調査報告書』（平成17年）の刊行がその調査結果の一つであるが、さらに移転の際に収集された民具など、調査の成果品を活用して、旧砂子瀬小学校を利用した砂川学習館が設置され、周辺地域の学習支援活動を進めているところである。

ところで当調査委員会は故森山泰太郎先生（大正4年～平成15年、以下敬称を略す）が委員長を務められていた。周知の通り、砂子瀬地域は昭和35年建設の目屋ダムによってすでに一度ダム水没移転を経験している。森山はその目屋ダム移転直前（昭和26年から27年）にも砂子瀬で調査を行っており、要するに2回のダム移転を調査の形で見守った。

目屋ダム移転前の調査の成果は、昭和44年刊行の森山泰太郎著『砂子瀬物語』（津軽書房）にまとめられ、ここには昭和初期頃までの奥目屋の情景が克明に描かれている。筆者も関わった平成の津軽ダム移転に伴う調査報告書『砂子瀬・川原平の記憶』は、昭和から平成期にかけての当地域の生活文化の変遷を追うこととなり、『砂子瀬物語』の続編のようなものとなった。

さて、この森山泰太郎以前にも目屋地域には多くの文人が訪れており、その中でとくに菅江真澄、平尾魯仙、そして森山泰太郎を含む津軽民俗の会（代表・松木明）が貴重な記録を残してきた。最近、筆者はこうした人々が残した資料を整理する機会を得た（砂川学

習館から刊行された『砂子瀬・川原平を歩いた人たち 砂子瀬・川原平の生活文化記録集 第3号』（平成19年）がそうした資料整理の成果である）。ここではとくに、平尾魯仙と森山泰太郎の関係の中から、白神山地や目屋という地域について感じたことを少し述べてみたいと思う。

2. 奥目屋と白神山地

白神山地という名はおそらく最近のもので、地図や資料を見ても「白神岳」はあるが「白神山地」はごく最近になるまで見あたらない。特に春秋林道問題と世界遺産登録の絡みで多くの人に認識されるようになった名称だと思う。

さて白神山地は原生林だということになっている。しかし、完全に無垢な自然という意味で原生林をいうなら、若干の補足説明が必要だろう。少なくとも目屋の川筋は長い間、弘前への薪炭供給地として利用されてきた経緯があり、江戸時代末期のものと思われる平尾魯仙の「暗門山水観」にも鬼河辺の土場（今のアクアグリーンビレッジ暗門のあたりだろう）が描かれていて、伐採がかなり奥まで進んでいたことが知られる。

伐採に携わった地元地域の古老の話からも、暗門川の上の木を切って流したことは歴史的な事実である。もっとも当時の伐採は成木を決められた範囲で切り、また切ったあと樹種の転換などは行なわなかったようだから、何十年もすればもとのような状態に戻っていただろう。他方でもちろん、暗門の奥まで薪材を切りに行ったということは、より下流域では伐採し尽くして利用できる場所がなくなっていたということでもあり、すでに幕末にはまとまった林木は奥山に行かなければ得られなくなっていた事を意味しよう。

いずれにせよ、白神山地の奥山の木も人々に利用されてはきたのである。しかし、奥山ゆえに戦後に展開された近代型林業の展開が遅れたのであり、さらに春秋林道計画が反対運動によって問題化し、このことが

逆にこの森林に新たな価値を確認する機会となって、白神山地は貴重な自然として認められ、世界遺産に登録されることとなった。



平尾魯仙「暗門山水観」より
鬼河辺の土場（青森県立郷土館蔵）

3. 平尾魯仙と目屋溪

森山泰太郎は『砂子瀬・川原平の記憶 津軽ダム西目屋地域生活文化調査報告書』で、この白神山地世界遺産登録地域のうち、暗門川を描いた平尾魯仙（文化5年（1808）～明治13年（1880））の「暗門山水観」を取り上げてその解説を試みている。

「暗門山水観」は、文久2年（1862年）に魯仙が門弟たちと目屋を訪れた際の風景画で、岩木川中流の杭止から、砂子瀬・川原平を経て、暗門川を遡る形で描かれている。

さて平尾魯仙はこの渓谷をどのようなものとして捉えたのだろうか。森山の解説はそこには踏み込んでいない。しかし、森山の残した講演録「平尾魯仙」（弘前図書館編『郷土の先人を語る（7）』）や遺稿『平尾魯仙伝（未完）』（ともに『砂子瀬・川原平を歩いた人たち』に収録）からおおよその見当はつく。これらの伝記によれば、魯仙が当時、国学の士となっており（暗門紀行の2年後の元治元年に平田鉄胤の門人となる）、平田国学の強い影響下にあった。

平田篤胤の国学はもちろん後の皇国史観に強い影響を与えたものだが、一方で篤胤はその師とされる本居宣長よりも土俗的な妖魅や幽境への関心が高く、後の日本民俗学との接点も指摘されている。そして平尾魯仙に関しては、まさにそうした方面への関心が著述の強い原動力となっていて、例えば森山がその主著としてあげる『谷の響』などは、津軽の各地で見聞きされ

た様々な怪異を集め、それをありのままの具体的事実として丹念に記述していくといった内容になっているのである。そして目屋もそうした奇譚の主要な採集地であった。『谷の響』の中から一つ例を挙げてみよう。

「卯の年の九月、砂子瀬村の権八が川原平村より二里先の鍋倉沢で貂を見て追い回したが捕まらない。一里ほど下ったところで柳の古木の根に柳茸があったので、少し取っていき、翌朝残りを取りに来たら茸も柳もない。不審に思って籠を見たら、昨日取った茸は柳茸ではない見も知らぬ毒茸で、急いで家に戻ると妻子らがすでに食べて苦しんでいた。危うく命は取り留めたが、すべてこれは獣どもの仕業であった。」（筆者による要約）

魯仙の奇譚はこのように場所や年、見聞した人の実名が記載されているという特徴がある。魯仙の描いた「暗門山水観」もこうしてみれば、この奥目屋溪谷の神秘性を具体的に捉え、ここに人智を越えたものを見出そうとしたものなのだろう。それは人面岩や池の杉、象岩や曲がりくねった巨木の根などを題材にしていることから読み取れる。江戸時代の終わり、明治維新へと大きく世の中が変わっていく時期に、国学を学ぶ知識人たちが辿り着いた自然への敬意の一つの形をここに見出せる。もちろんそれは机上のものではない、弘前から暗門までの徒歩の過程での、素直な驚きと畏れの顛れでもあったろう。

4. 山中怪異の話

森山の『魯僊伝』はやや自叙伝風に書かれており、若き日の森山の知的関心が、こうした魯仙の視点に強く惹かれていった様も描かれている。時代を隔たるとはいえ、魯仙の居宅は森山の生家に近接していたから、森山にとって魯仙は身近な郷土の偉人として自ずと敬愛すべき存在であったに違いない。

しかし画家としてではなく、国学者として、なかでもその土俗的な魑魅魍魎の世界の魅力を魯仙が引き出したところに森山の関心はあった。そしておそらくこの関心が、その後の森山自身の民俗学者としての成長を促してもいったのである。そしてまさに『砂子瀬物語』には、こうした山の神秘への憧憬が色濃く見られるように思われる。

当時の地元の古老から聞いた聞き書きがそのまま淡々と綴られ、解説も何も無い本書だが、気を付けて読んでいくと、『砂子瀬物語』にはそうした奇譚が随所に散りばめられている。短いものを一つあげよう。

「工藤兼吉は炭窯の手伝いに行き暗くなって戻って来た。家では婆と嫁が迎えに行ったが、善吉爺はなかなか来ない。あきらめて戻って来たら村のお宮の境内で、大きな木や岩に突き当たって、おーっおーっと叫んでいる爺を見つけた。そしてあたり一面に狐の足跡があった。」(140頁)

もっとも、砂子瀬での調査当時(昭和27年頃)、森山は、奥目屋の人々を「平家の落人」ではないかと言っておもしろがって語るマスコミに閉口し、当時の講演録(「平家の落人」「山村の文化遺産」)でも、奇をてらうような山村生活の表現の仕方に対して、これを強く戒めている。

森山は自分の奥目屋での調査を次のように提示したいと考えていた。砂子瀬での調査—そしてもちろん『砂子瀬物語』—は、ここに日本人にとって奇異なものがあると言ってそれを提示するものではない。そうではなくて、「あの山村は、山に依存した暮しの業や、山と人生の深い関連に立つ、私共の前時代の暮らしを今に刻明に保存して」(森山「平家の落人」、『砂子瀬・川原平を歩いた人たち』に収録)くれているのであり、ここから森山は読者に昔の日本の当たり前前の姿を汲み取ってほしいのである。だから、山中怪異についても次のように考えていたであろう。

昔の日本には、ごく当たり前にも其処此処に様々な奇譚が成立していた。なかでも山中では様々な怪異が頻繁に生じたらう。そして奥目屋では、それがごく最近まで実際のものとしてあった。こうしたことを論証したかったのだと思われる。



写真 モノ淵：村市の対岸のこの淵にも
大クモの伝説が残る

(昭和27年、砂子瀬民俗共同調査団のアルバムから)

5. 今にのこる奇譚

もっともこうした奇譚は、森山の調査時どころか、筆者らが行った平成の民俗調査においても決して昔話ではなかった。我々の調査の中でも、村の人々が体験した、山中の奇怪な話を収集することは少なからずあり、しかもそれはけっして昔の話ではなく、ついこの間の生きた現実の話として語られるものであった。例を二つあげよう。

「母はこのあたりのカミサマだった。狐の話をよくした。自分はもちろん狐は信じない。でもあの場所だけは何かあると思うところがある。目屋ダム下の淵のあたりで、あそこで若い頃工事に入ったが何人も亡くなった。あそこには母は狐がいると言うが、たしかに何かがあると思う。今でも夜通るとぞっとする。」

「ある日母親が早くこっちサ来いと言う。あまりうるさいので行ってみると、今奇怪なものが通っていったと言う。大きな丸い固まりで、人間の足の片方だけのようであり、しかもそこに毛がたくさん生えていた。嘘だと思ったけれども、確かに床の上に何か引きずった跡があってヌルヌルしている。その直後、兄が足を病んでしまった。」

二人とも、きわめて合理的な思考法の持ち主である。親たちのような土俗的信仰はもっていない。この話は本人たちが体験した紛れもない事実なのである。

菅江真澄(宝暦4年(1754)~文政12年(1829))の「雪のもろたき」や「外浜奇勝」でも、暗門行きの山中での滝の神の轟音や尾太鉦山の廃鉦にまつわる万助の夢の話が、目の前の出来事として紹介されている。

山中の怪異は、山の中で仕事をし、暮らしてきた生活の中では紛れもない真実なのであり、それ故に人々には山に対する怖れや畏敬が経験としてはっきりと組み込まれていた。我々日本人の先祖が皆持っていた自然への畏れと敬い。この地域ではそれがごく最近まで保持されてきたといえようか。近代社会の持つ合理性は、こうした神秘的なものへの畏敬を日本人の中から徹底的に破砕してきた。今、ダム水没移転で人影のなくなった砂子瀬・川原平を観光バスが日に何台も通り過ぎていく。神秘的白神山地も単なる観光地になってしまわないだろうか。魯仙や森山、あるいはまた菅江真澄が暗門や砂子瀬・川原平に何を見たのか、もう一度じっくりと考えてみたいものである。

(平成19年七夕の日に)

白神山地の鳥たち

アカゲラ

一番ポピュラーなキツツキ。さえすりの替わりにドラミングとよばれる木を突き大きな音を出す。



オオルリ

青く綺麗な野鳥で人気がある。夏鳥として飛来し、溪流の見晴らしのよい梢で美声で鳴く。



ウグイス

春になると戻ってきて繁殖する。ホーホケキョと鳴く声は多くの人知っている。



シノリガモ

冬は海で群れて生活するが、繁殖期は深山の溪流に入り子育てをする。



キヒタキ

ブナ林を代表する野鳥のひとつ。夏鳥として飛来し、ブナの中の美声で鳴く。



ヒガラ

一年中生息し、ツツピンツツピンと高い声で鳴く。



シジュウカラ

一年中生息し、ツツピツツピとテンボ良くさえす。冬は群れて過ごす。



ヤマカラ

一年中生息し、ツツピーツツピーと鳴く。冬は他のカラ類と一緒に群れて生活する。



白神山地ビジターセンター

【開館時間】 9:00～16:30 大型映像上映時刻 (10:00・11:20・13:00・14:10・15:20 ※上映時間約30分)

【休館日】 (1) 4月～12月 第2月曜日 (祝日の場合は翌日)
(2) 1月～3月 毎週月曜日と木曜日 (祝日の場合は翌日)
(3) 年末年始 12月29日～1月3日

【入館料等】 入館は無料 映像観覧は有料 ●一般 200円 ●小・中学校 100円 ※団体割引 (20人以上)

〒036-1411 青森県中津軽郡西目屋村大字田代字神田61-1

Tel: 0172-85-2810 Fax: 0172-85-2833

ホームページ <http://www.shirakami-visitor.jp/>

※42名まで収容できる会議室、工作室があります。ご利用下さい。(要申込み)

※学校の見学や体験学習については相談をうけています。ご連絡下さい。